阿波の偉人再発見！

鳥居龍蔵

その⑥

コロポックル伝説の謎を探る

国の政策によって、千島アイヌ（千島列島に住んでいたアイヌ）のシコタン島への強制移住がすすめられていた19世紀末に、鳥居龍蔵は千島列島の民族調査の機会を得ました。1899年（明治32）5月のことです。

そもそも龍蔵が千島列島の調査に向かうことになった目的の一つは、師匠であった坪井正五郎（つぼいしょうごろう）が唱えていたコロポックル説を検証することにありました。

コロポックルとは、アイヌの人たちが語り伝えてきた伝説に登場する種族で、アイヌが北海道や南千島・サハリン（樺太）に定住する前から、この地方に住んでいたといわれていたのです。背丈が低くて動きがすばやく、漁にも巧みで、フキの葉で葺（ふ）いた竪穴に住んでいたと語られてきました。

龍蔵は、函館から警備艦「武蔵」に乗船し、根室を経てシコタン島に寄港します。ここで案内人としてアイヌ人グレゴリーに同行を求め、エトロフ島、ウルップ島、パラムシル島などに寄りつつ、千島列島北端のシュムシュ島を訪れます。そして、帰途再びシコタン島で約一カ月滞在して調査をしました。もうすでに、この時には北千島に住むアイヌの人々はこの島に移住させられていたのです。環境の変化もあって、人口も急減していました。

龍蔵は、この調査で千島アイヌの体質・言語・風俗・習慣・古伝・口碑（こうひ：言い伝えのこと）などを調べ、この地域の先住民族をコロポックルとする坪井の学説をくつがえして、アイヌこそが石器時代からの先住民であると結論づけました。たとえ師弟関係にあろうとも、自説を真っ向から主張するところに、龍蔵の学問に対する誠実さがあらわれていると考えられるでしょう。

龍蔵が調査で出会った千島アイヌ

千島アイヌが絶滅した今となっては、龍蔵の著した『千島アイヌ』が、ほぼ唯一といえる千島アイヌの民族誌であり、その滅びゆく民族に対する情愛の念がみごとに凝縮された文章が綴られています。

（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館　石尾和仁）